

に珍らしいかぶとが、にの棲息が見られる。

七 変 災

藩政以前の三間町の変災については、清良記等に散見する程度で明確な記録がないから藩政以後記録の徴すべきものについて略記すれば次の如くである。

寛文六年(一六六六・家綱) 前代未聞の大風雨あり。

元禄十四年(一七〇一・綱吉) 夏旱魃、秋洪水、宇和島、

吉田兩藩の損毛三万石にのぼる。

享保七年(一七二二・吉宗) 七月兩度大風雨、兩藩の損毛

三万石に近い。同八年引続き大凶作、同九年夏大旱魃、

兩藩の損毛六万二百石、同十四年九月風水害があり、吉

田藩より幕府へ提出した損毛の覚に

一、田 四百八十五町

一、畑 三百十五町余

一、井関 二千七百二十一ヶ所

一、堤川除 一万二千七百間余破損

一、潰家 六百五十三軒 と見えている。

享保十四年(一七二九・吉宗) 八・九月兩度洪水・虫害、

損毛四万五千石、同十五年凶年につき、賑恤一万二千

三百余人。同十六年年中賑恤絶えず、同十七・十八年は世に言う「享保の大飢饉」に当り天災虫害が頻りに至って上下未曾有の困窮におちいった。この為飢餓に迫る者二万四千六百人、兩藩共年中賑恤につとめ、吉田藩ではその費用三千兩を一ヶ年六百兩宛五ヶ年賦で皆済することを約して幕府より借入れた。

この後農作物に対する風水害及び旱魃等の変災は、殆ど毎年の如く起り、一々これを挙げるに暇のない位である。就中明和四年(一七六七・家治)の風水害四万石、同六年夏の風水害二万三千石等はその甚しいもので、文政三年(一八二〇・家斉)の宇和島藩記録に昨二年の洪水のため破損した井川普請費津島御庄分凡そ二十五万人役と載っていることから見ても、如何に当時の風水害が激しかったかわかるであらう。

明治以降もまた殆ど毎年のように変災に襲われている。昭和に入っても九年九月二十一日から二十二日にわたる室戸台風を始め、二十年九月の枕崎台風、二十二年のカスリン等過去において町内が被害を受けた変災は少くない。

特に昭和十八年七月二十一日から二十四日に亘る台風は降雨甚しく宇和島観測所の総降水量は九四二耗に及び三間

川も氾濫して元宗その外の提防が破壊した。

然し、ジェーン・デラ・ルース・ダイナ・第十五号から最近の三十六年六月の集中豪雨、同九月の第二室戸台風など全国各地に多大の被害を与え、殊に昭和二十四年六月二十一日のデラ台風は南予地方の漁船に壊滅的な打撃を与え、多数の人命を奪ったが、当町が蒙った損害が少なかったことは何より幸といわねばならない。

その他の変災について述べてみると、

慶安二年(一六四九・家光)大地震

宝永四年(一七〇七・綱吉)大地震

元文二年(一七三七・吉宗)閏十一月二十八日宮野下に

大火あり、全町悉く焼失した。

明和九年(一七七二・家治)宮野下に大火があり町内残

らず焼失した。元文の大災を距ること三十五年である。

天明五年(一七八五・家治)正月宮野下又火を失し、町

の大半が消失した。

天保五年(一八三四・家斉)十一月二日宮野下町出火折

柄の強風に煽られ町村合せて八十戸を焼失した。隣村

よりは粥の炊出しにあたり跡片付けの人夫を送る。役

人は小屋掛け用の木・竹・縄・藁等を三間内に割付け

て差出させ、隣村の庄屋達を小屋掛作配方に任じ仮小

屋を建てると共に、人手のない家では人夫に命じてこ

れを建造せしめた。罹災者は男女人別に応じて救助米

を与え家屋建築の資金を貸与した。天明の火災を距る

こと四十九年、元文を去ること約百年、その間に四度

の大火に見舞われた町民の困惑は実に甚だしいものが

あったであろう。

口碑によると当夜の火災は町の下手に起り次第に上手に

延焼し上酒屋(桑名屋)後の井上酒店今の西本酒店)の

隣で消火した。桑名屋では焼跡修理の際壁より小さな仏

像が出たのでこの仏像の利益により類焼を免れたものと

その後永くこれを尊崇したといわれている。尚この時波

岡村正太夫が米屋甚左衛門夫婦の危難を救ったというの

でその筋より鳥目二百文を賞与せられた。

天保六年九月十三日 藩より諸国とも不作で穀物が沸底し

米価が追々高くなるので、領内の穀物を他所へ売ること

を堅く禁ずる旨の触れが出されている。

弘化三年(一八四七・家慶)丙午暴風があり、後の人これ

を午年の大風と語り伝えた。

安政元年(一八五四・家定)寅、大地震があった。今日に

伝える所では震動数日に及び人心安まらず竹藪に仮小屋

を設け夜具、炊事用品を運んで一家難を避けたという。

大正十一月(一九二二)五月二十三日午後零時十五分、

汽車の煤煙によって宮野下村稲垣亀治方から出火、また

たく間に四辺に拡がり今の恵美須座の辺りを中心にして

午後一時間四十分鎮火するまで裏通りの民家をなめ尽

した。当時三間村・成妙村・二名村の全消防組、好藤・

旭・泉からも駆付け、特に此の地方では最初であった宇

和島市藤江、高光村のガンリンポンプも出動消火に当っ

た。近年稀なる大火であった。

明治三十八年(一九〇五)六月にも強震があったがその後

人畜に被害を与えるようなものは起らず、ただ昭和二十

一年(一九四六)十二月の南海地震は地方では珍らしく

激しい地震であった。

昭和三十八年(一九六三)三月から五月の間七十日に亘っ

て長雨が降り続き、麦の収穫を皆無にし、菜種も大被害

を蒙った。